

横山大観記念館秋の展示案内 <2023年10/5～12/17>

「上野公園開園150年に寄せて」

■展示テーマ概要

「大観と上野公園」

明治以降、国の近代化にともない、絵画もまた、国家主導の勸業博覧会や美術展覧会、私設の美術団体による絵画展覧会などを通して近代化を果たしていきました。明治9年に開園した上野恩賜公園はそれらの会場となり、国民の注目を集めました。

とくに、大観が出品した展覧会（院展、文展、再興院展など）も、公園内にあった施設で開催されることが多く、竹の台陳列館（皇室博物館が管理。大正15年に東京府美術館が開館したことにより閉館）はその一つです。大々的な絵画展覧会に大観は様々な試作を発表し、画壇をけん引していったのです

美術館の建設にも、大観は関係しています。大正15年、実業家佐藤慶太郎の出資により東京府美術館（現・東京都美術館）が建設されますが、このとき大観ら美術家たちは、お礼として合作の画帖を佐藤に寄贈しています。

東京都美術館再建にむけての運動にも大観は積極的でした。昭和31年、芸術家81名が都美術館増築の請願書を都議会に提出しましたが、この時真っ先に署名をしたのが大観で、「議会まで出向いてお願いしたい」と言うほどの熱の入れようだったといえます。

今回の展示では、上野恩賜公園の開園150年を記念して、同地にまつわる大観作品を紹介します。なかでも《四時山水》は再興第28回日本美術院展の出品作で、その展示会場は上野公園内の東京都美術館でした。また、そのほかの作品（未完本、下図など）についても、その完成画は再興院展の出品画として、公園内の施設に展示されました。このように、大観の近代化への試みは、「上野恩賜公園」という舞台で繰り広げられたともいえるのです。

■展示作品解説

《作右衛門の家》（未完）大正5年

完成作《作右衛門の家》（山種美術館蔵）は、再興第3回日本美術院展（上野公園内・竹の台陳列館）に出品された。平穏で牧歌的な情景を鮮やかな色彩で描いた作品で、タイトルの「作右衛門」とは架空の農夫の名。生い茂る樹木のなかには馬小屋ものぞかれる。思うようにいかず、完成に至るまでに三度塗りつぶしをしたと伝えられる。

《春光る》（未完）昭和21年

完成作《春光る》（ひろしま美術館蔵）は、再興第31回日本美術院展（東京都美術館）に出品された。大観は本作品を疎開先である熱海の伊豆山で制作した。中央に富士がそびえ、そのふもとは、溶岩、樹海などが描かれている。完成に至るまでの未完本は計13枚残されており、大観の意欲のほどがうかがわれる。



《嶺風》（「山四趣」のうち）（未完）大正14年

完成作「山四趣」（大倉集古館蔵）は、再興第12回日本美術院展（上野公園・竹の台陳列館）に出品された。「山四趣」は「霞」「雨」「風」「雪」の四幅対で、四季の気象の変化を描きわけた作品。大観自身、「墨をもって、色の感じを出したい」と語っているように、墨一色で折々の山の風情を表現している。

《竹雨》大正4年

再興第2回日本美術院展（上野精養軒）に出品された《竹雨》（東京国立博物館蔵）の類似作品。雨にそば濡れる竹林の、湿潤な空気を水墨で表現した作品。画面の下から上へと竹林が連なり、鑑賞者の視線を、竹林の奥にのぞかれる廬（いおり）（隠者の住まい）へとみちびく構図となっている。



《漁火》昭和26年

再興第36回日本美術院展（東京都美術館）に出品された《漁火》（足立美術館蔵）の類似作。院展出品画には、漁をする舟とその漁火が描きこまれている。それに対し本作品には舟が描かれず、暗い海の静かな様子が描かれている。夜の海をテーマとするにあたり、漁船の有無についても試行錯誤をした様子がうかがわれる。

《四時山水》昭和22年

再興第28回日本美術院展（東京都美術館）出品作。日本美術院創立50周年を記念し、大観はこの長巻（26.8m）を制作した。巻頭には師である岡倉天心の言葉「一切の芸術は無窮（むきゆう）を趁（お）ふの姿に他ならず」から引用した「趁無窮（むきゆうをおう）」（極まりなきものを追い求める）の語が記される。日本各地の風景が四季の変化とともに描かれ、同時に日の出から日没までの一日の流れも表現されている。



《燕山楚水の巻》（小下図）明治43年

完成作の《楚水の巻》（山種美術館蔵）は、第4回文部省美術展覧会（上野公園・竹の台陳列館）に出品された。明治43年6月より一か月半の間、大観は中国各所を観光し、帰国後、長江とその沿岸の景色に取材した本作品を制作した。大観にとって初めての絵巻の作品でもある。